

.....

書 評

.....

Bernhard Brons: *Gott und die Seienden*  
 — *Untersuchungen zum Verhältnis*  
*von neuplatonischer Metaphysik und christlicher*  
*Tradition bei Dionysius Areopagita.*

Göttingen, 1976

熊 田 陽一郎

この論文は1974/75年 Göttingen 大学神学部に提出された博士論文である。丹念に概念用語の調査に基づき著実に積みあげられた研究であって、偽ディオニシウス文書 (Corpus Dionysiacum. 以下 CD と略称) の本格的研究の少い現在、貴重な手引の書といえることができよう。しかしそれでもいくつかの問題点を指摘しておかなければならない。それはこの論文自身の問題点であると共に、CD そのものが孕む問題であるともいうことができよう。

冒頭に、ルターという言葉が掲げられている。

「彼がそもそも誰であろうと、かのディオニシウスなる人物に余り大きな権威を与えることは、私の意に染まぬことである。……彼が我々にとってそれほど有害であるのは、彼がキリスト者ではなくプラトン主義者だからである。信仰をもつものは、たとえ僅かであっても彼に心を傾けるべきではない。彼によってキリストを識ることはできないし、すでに識っている者は、これを失うであろう。私は自分の体験から、このことを語っているのだ」(9頁)。この手厳しいディオニシウス批判は、そのままこの論文の主題をなしている。ルターがその「宗教的本能」から語ったことを、筆者は論証しようとするのである。

かかる態度は序文に示される研究史概観や、論文の方法にも窺うことができよう。研究史については、第二次大戦後に現われた比較的新しい研究のみを論評している。それによれば、H. Langerbeck, O. Semmelroth, W. Völker, R. Roques, E. v. Ivánka

等の研究を貫いている「導きの糸」は、「CD のもつキリスト教的性格」であった。即ちこれらの研究は、CD の本質を新プラトン思想ではなくキリスト教思想と規定するばかりでなく、CD がもともと関わろうとしなかった神学論争の党派の中に彼を位置づけようとしている。このような偏向の原因としては、彼らが十分な資料批判と用語概念についての基礎調査なしに、CD 思想の性急な体系化を試みた所にあると思われる。従って著者は自らのとるべき方法を、次のように要約する。

- (1) CD の構造分析と並んで、概念用語の調査分析を入念に行うこと。
- (2) 一定の成果を得るまで、主観を混えず、CD 自身に語らしめること。
- (3) CD の体系の破綻箇所に注目する。即ち明らかに強引と思われる主張や、逆に故意の沈黙を観察し、そこに露呈してくる体系の矛盾、恐らくは新プラトンの矛盾を探り当てる (p. 28)。

この (1), (2) については、全論文を通じて忠実に遂行されているとみてよからう。ただし (3) については微妙な事柄だけに、個々の事例についての検証が必要であろうが、ここではその余裕はない。

論文の構成は三章から成る。第 1 章で存在者 (die Seienden), 第 2 章で神, 第 3 章で両者の関係 (創造と受肉) を取扱う。

第 1 章で著者は、CD の思想はひとつの「存在論的座標系」(Koordinatensystem) を基礎として成立するという (p. 51)。即ち神と被造物を共に包括し得る概念は CD には存在せず、世界は神に対して求心的弁証法的関係に立つ (p. 30)。そこで彼の存在論は、この両者の関係を示す多様な概念や形象を駆使していくつかの並列的シェーマを形成することにある。著者はここで二項より六項に及ぶ多項式シェーマの分類を行っているが、そういうように並列する多様なシェーマにも拘わらず、すべての存在者は中心たる神に向って求心的に位置づけられ、全体は神より「降下」し又そこに「上昇」する垂直構造によって、ほとんど一元的 (monistisch) な完結性を示す (p. 51 以下)。水平の動きは僅かに人間の階層においてのみ見られるが、ここでも聖書的な歴史性は貫徹されない。即ち旧約→新約, 異教→ユダヤ教→キリスト教といった救済史的区分には本質的意義が認められず、むしろ人間全体が一つの存在階層として考察される。それどころかこの著者によれば、教会の教える救済史の教義は、自らの体系の調和を破る不協和音として、CD においてはむしろ無視され排除され

る傾向にあるという (p. 75 以下)。

第2章には神についての考察がまとめられている。最初にその単一性が取扱われるが、CD が考える神の単一性は、結局「形而上学的単一性」(die metaphysische Einheit) のみとされる。これは、神が自分からすべての存在者を発出せしめながらも、それらすべてを自らの内に予め先在的に統一保有し、しかも自らはいかなる多性にも染まぬ純粹の単一性を保持する事態を指す (p. 80-88, p. 98)。この外に問題となるべき単一性は三位一体性という神学的単一性であるが、著者の見解によれば、CD では三位一体性が結局形而上学的単一性に包含されている。即ち、父・子・聖霊という三位格の分別と統一とは、本来のキリスト教教義における重みを失い、むしろ神の内に包含統一されている諸存在者の分別・統一と同じ思考地平に吸収されてしまう。著者の言葉をかりれば、

「父・イエス・聖霊とは、次のことを示すキリスト教的略記記号 (Sigeln) に外ならない。即ち万物の根源がその超越的単純さに固執することなく、多数の存在者として自己を展開し、しかもその単一性は些かも損われず、むしろすべての存在者にもその単一性が浸透してゆくことを示す記号なのである」(p. 127)。

従って、父・子・聖霊という本来神の内的位格を表わすべき名称も、善・光・生命などの形而上学的神名と同じレベルで、全体としての神を表現する神名として使用され得る。更にいえば、父・子などの聖書的神名は、善という最も根源的神名の一局面に過ぎないという推測もなりたつのである。

これに続く第二の問題点としては、CD の思考においてイデアの場が失われていることである。新プラトン思想においては、一者→(ヘナデス)→ヌース→魂→自然という一貫した存在階層が形成されており、イデアはヌースの中にその不動の座を与えられてきた。しかしCD はその一者と知性を融合せしめて自らの神概念を形成し——それは神の人格性を確保するためであるが——しかも神のなかに多数性を持つ込むことを拒否したため、イデアは神(一者+ヌース)の外に排除される。CD の体系において神に続くものは天上のヒエラルキアであるが、しかしイデアをここに位置せしめることもできない。この場合、神ではない中間原因者—神々が生じるからである。このように神の単一性の考察において、すでにCD のもつ問題性が顕われてくる。即ちキリスト教の伝統教義は新プラトンの構造に吸収されてその救済論

的意味を失い、他方新プラトン哲学の整合性はキリスト教の影響を受けて破壊された。このCD思想のもつ「不幸な」性格は、第3章に至って益々はっきりした形をとってくる。

第3章においては、第1・2章で取上げられた存在者と神が、その関係の面から今一度総合的に考察される。ここで特にキリスト教の中心的神学概念である創造と受肉が扱われ、CDの孕む矛盾が顕在化する。

まずCDの創造論では、その用語面でも又思考そのものからみても、自由意志の要素は殆んど排除され、創造は神の本質の必然的な展開となる。従って神と存在者の間には、「緩和されたる実体的同一性」(die modifizierte, substanzielle Identität)が成立する。神と存在者とは結局、内部的に分節されているが実体的には同一の有機体なのである。従って神と存在者の関係は無時間的永遠的であり、この意味で創造と摂理(πρόνοια)とは切離すことができない(p. 232以下)。

一方受肉もCDにおいては、創造・摂理と本質的に異なるものではなく、むしろその「重複語」(Dublette)であって、神と存在者の発出による同一性を示す一視点に過ぎない。ただ受肉の場合、特に人間が問題になることはいうまでもないが、その人間というのは、聖書でいわれる「肉としての人間」(σάρξ)ではなく、個的人間でもなく、むしろ一つの存在階層としての人間、即ち人類なのである。著者はここでD. Fr. Straußの言葉を引き、CDの考え方がむしろ近代のキリスト教解釈に比較し得ることを示唆している。即ち、「人類」における神人両性の結合、ひいては「人間となった神としての人類」という解釈の可能性である(p. 3-8)。

ただし創造・受肉の両概念を扱う場合、当然のことながらCDはキリスト教の伝統から様々の影響を受けることになる。創造の場合には中間原因を排除することによって、新プラトン派的体系の整合性が破られる結果になったことは前述の通りである。受肉については殊に数多くの聖書記述がCDに持込まれてくるが、何よりも受肉する主体として、「イエス」の名称が53箇所に使われることは、先ず注目すべきことに違いない。更にイエスの処女降誕、湖を渡る奇蹟、洗礼、最後の晩餐、変容、死などが取扱われる。これらはいずれも人間として神としてのイエスの在り方に光を投じる重要な事件であり事柄であるが、著者の見解によれば、これらの出来事は皆巧みな解釈のもとに変容され、新プラトンの体系的なかに組込まれてしまっ

ている。結局イエスの生と死とは、「個人の回心と上昇という、イエス自身とは関係のない認識形而上学的行為に対する典型としての機能しかもたない」(p. 312)。従ってイエスという神人の名称も、CD にあっては全く没歴史的主体と変る。即ち、「没歴史的で、救済のドラマとは一切関係のない、全存在者とその可能なるすべての活動及び認識に関する、絶対的形而上学的主体」(p. 322)ということになる。

受肉の概念は、元々CDの体系にはなじまぬものであった。もしディオニシウスがキリスト教の一回的個人的受肉を真剣に受止めたならば、そしてイエスの歴史的な生と死、及び肉体の復活を自己の体系に持込もうとしたならば、彼の体系は崩壊したであろう(p. 277以下)。しかし彼が新プラトンの形而上学的体系に固執した結果は、キリスト教的伝統をすべて「攪乱要素」(Störfaktoren)として扱うことになり、彼自身にも又彼の信奉者にも、新約的信仰の理解への道を鎖したのであった(p. 324)。受肉についてのこの結論は、明らかに冒頭のルターの言葉と同じ精神をもって語られ、これを裏書きするものである。

最終結論の部分で、この批判は今一度反芻される。結局CDの体系は、キリスト者の陥る根源的誘惑を示している。信仰と世界観との完全な調和などはあり得ない。CDの試みは、キリストにおける恩寵と審判の告知が、手近な世界観の受容によっていかに変質してゆくかを示す好例である。それはジユフォスの営みに等しい。プラトニズムの大地を離れて天上に押上げられようとする大石(キリスト教の伝統)は、大地のもつ重力によって常にその基盤(或いは出発点)に迄押戻される。従って著者によれば、CDの思想は皮肉な意味における *theologia crucis* なのであって、自己の果そうとしたキリスト教の弁証には失敗し、しかも自らの母胎である新プラトン哲学は破壊される結果となった。CD自身が後の思想史の流れのなかで辿る不思議な運命もこのことを示している。この文章群は、原著者の凡そ意図しなかった形においてのみ、イエスの教えを世に示したのであった(p. 325-329)。

以上で論文紹介を終るが、最後にこの論文について我々の抱くある種の懸念を書き添えておかなければならない。それはこの論文の強味である著実な用語概念の分析と、CDの思想自体について下される否定的な評価との間に、今ひとつ重要な段階が欠落したように思われることである。即ち、著者はこのようなCDの評価を急

ぐ前に、むしろその独自の性格を玩味する時間をもつべきではなかったか？ 勿論 CD 内部での新プラトンの要素とキリスト教伝統との間の矛盾・対決は避けて通れぬ問題であるにしても、この対立の視点からのみ CD の思想を割切ってゆくことは、果して CD 理解の正しい道であろうか？ 著者の精神は余りにルターの呪咀にひきずられてはいないか。

CD の思想は確かに純粹のプラトニズムでもなく、純粹の新約思想でもない。しかしそこにこそ、CD の思想の価値があるのではないだろうか。この点を今少し押しひろめて考えれば、これはキリスト教思想全体にかかわる問題である。著者のいわゆる「新約的思想」乃至「キリスト教的伝統」はすでに高度の形而上学的思弁を含むが（三位一体、創造、受肉、救済など）、これらはどのようにしてそこまで思想化されたのか。そしてかかる弁証の正当さを保証するものは何か？ 換言すれば、もし著者が CD の思想をキリスト教弁証の悲劇的失敗例とするならば、その成功例はどこに見出されるのだろうか？ 更にいえば、CD の濃厚な影響のもとに展開されてゆく中世思想全体は、どのように位置づけられるのだろうか？

著者自身、哲学的思弁を導入することに必ずしも反対はしていない。即ち神学は自らのゲッターに閉じこもるべきではなく、「肉となった言葉」という受肉の思想に従い、すべての時代の生と思想を咀嚼し、キリスト教の信仰をこれらの手段によって明確化しなければならないと述べている以上（p. 326）、この点についての著者より綿密な考察が望まれる。「肉となった言葉」は、やはりその時代、その地域に応じた容貌をとるべきではないか？ 6 世紀末のシリアで、キリスト教思想が CD とは全く異った形で現われることができたであろうか？ そして「十字架につけられた言葉」という著者のクリテリウムは、具体的に何を指示し得るのか？ すべての人間的価値を顛倒する「十字架」は、すべてのキリスト教思想にひとしく打当る筈のものであって、CD のみがこれによって断罪されてはなるまい。

以上の疑念を最後に表明しなくてはならないにしても、これは論文全般にわたる手堅い研究の成果を傷つけるものではない。初めに述べた通り、この書は我々にとって難解な偽ディオニシウスの世界へ導いてくれる得難い手引の書であるという評価は、動かし難いものと思う。